

○村松良寛（曹洞宗僧侶）が、あるキリスト教会にて安息日礼拝を傍聴した際の感想の投稿（1882）

帰途、柳橋の辺を彷徨す。是日や安息日にして処々に耶蘇教講義の牌を掲ぐるを觀る。即ち某教会堂に至り、名刺を投じて傍聴を請い、堂に入り暫時休息す。時已に至れば、一の美少年、堂隅のテーブルに寄りて音楽を奏す。其声鏘々[ソウソウ]として衆人の耳朶に透徹し、聞者皆形ちを攝[せ]め威儀を正す。堂中之が為に寂々たり。少焉ありて教員は徐々として出て堂の中央に立ち、信徒に賛美歌を称えしむ（此間凡そ二十五分間なり）。而して伍を分ち、列を正し、大都四伍を以て一列とし、其次第順序を以て、之に教授す。其弁舌実に滔々乎たり。丁寧反復訓語惇々、恰かも慈母の乳児に於けるが如し。信徒一人として倦厭の色を顯すものあることなし。偕又授業の畢るや、異口同音に称へて曰く、天主我に幸福を与え玉へと。後、再び賛美歌を唱へ、跪拝をなし、各自解散せり。其肅整、実に感服せり。而して余も共に堂を出て忽々舎に帰り、先づ燈を点じ、案に寄りて、熟々彼が拳動を感賞して止まず。且つ我教法の将来如何を思惟して、終宵眠に就くを得ず。

（『明教新誌』1336、1882.6.4）